



リビア：ハリーフア・ハフタルが国軍総司令官に就任

3月2日、東部トブルクの代表議会は、ハリーフア・ハフタルの中将昇格と国軍総司令官任命を可決した。ハフタルは東部ベンガジを中心に民兵組織「リビア国民軍」を率いてイスラーム過激派掃討作戦「尊厳作戦」を遂行しており、トブルク政府及び国軍は同作戦を事実上支援していた。しかし国際社会は、リビアにおけるイスラーム過激派の脅威が大きいことは認めながらも、政府及び国軍が民兵組織と手を組み軍事作戦を遂行することは看過できないとして、「尊厳作戦」を再三批判してきた。国軍報道官は、ハフタルを公式に国軍に迎え入れることで、「尊厳作戦」の正統性をめぐる議論は終わると述べている。

トブルク政府と対立する西部のトリポリ政府は、ハフタルはカッザーフィーの元支援者であり、「尊厳作戦」で多くの者を殺害した戦争犯罪者であるとして、今次決定を強く非難した。

評価

トブルク政府が今次決定により「尊厳作戦」に正統性を付与したとしても、リビア内戦の停戦協議を仲介する国連（国連リビア支援ミッション；UNSMIL）や欧米諸国はその正統性を認めないだろう。そもそもハフタルの「尊厳作戦」は国軍の意向とは無関係に独自に開始された軍事作戦で、当初はリビア政府（トリポリとトブルクに分裂する前の統一政府）もクーデタと非難していた。また国際人権団体は、「尊厳作戦」は軍事作戦のなかで民間人の拉致、殺害を行っている」と指摘している。このような「尊厳作戦」、そしてこれを率いるハフタルが、国軍だけではイスラーム過激派掃討を遂行できないとの理由で国軍に迎え入れられるのは、国連・欧米諸国としては容認しがたいはずである。国連・欧米諸国はトブルク政府をリビアを代表する唯一の正当な政府と認めているだけに、今後、トブルク政府に対してどのような態度で接するのか注目される。特に、国連はリビア内戦の停戦対話を仲介しているため、ハフタルの総司令官就任は今後の停戦対話にも影響を及ぼしかねない。

（金谷研究員）

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

◎各種情報、お問い合わせは中東調査会 HP をご覧下さい。URL：<http://www.mei.j.or.jp/>